

天命の科学

宇宙の原理、それは自然の原理でもあるが、それはとりもなおさず老子の「道」のことである。老子のいう「道」を正しく歩むためには、宇宙の原理や自然の原理にしたがって行動するのが良い。宇宙の原理にしたがって行動するには、宇宙の意志、それは神の意志ということでもあるが、そういうものを信じるのがまず必要である。私たちは、宇宙の意志とか神の意志というものがどういうものかを知ることができないので、具体的には老子の「道」を勉強して、少しずつでも実践していくことが有意義だと思うが、それはややもするとさぼりがちになるので、私は「祈り」をお進めする。何かあるごとに神に「祈り」を捧げていると、多少なりとも老子の「道」を実践することができるだろう。私はそう考えているのである。後ほど「祈り」の効果については、詳しく述べるとして、とりあえず宇宙の意志というものがあるのかどうかについて述べておきたい。宇宙の意志というものはあるのである。

私の電子書籍「靈魂の哲学と科学」の最終章「終わりに」書いたが、ケンブリッジ大学のスティーブン・ホーキングも、現在、私たちが見ている宇宙は「神」のような、何らかの手によって作られた設計図にしたがって作り出されたのだという趣旨のことを言っている。

桜井 邦朋（さくらい くにとも）という大先生がおられる。桜井邦朋（1933年5月27日生まれ、京都大学理学部卒業、神奈川大学名誉教授。）は日本の代表的な宇宙物理学者。太陽物理学、高エネルギー宇宙物理学の世界的な権威であり、現在、早稲田大学理工学部総合研究センター客員顧問研究員とユトレヒト大学、インド・ターター基礎科学研究所、中国科学院の客員教授を努めている、まさに日本が誇る世界的学者である。その大先生が、「宇宙には意志がある」という本（2001年6月、徳間書店）を出しておられる。その本の中で先生は次のように言っておられる。すなわち、

『ここで、私は一つの仮説を読者に提示したいと思う。それは「人類の誕生は、宇宙の進化から必然的に生み出された結果なのではないか」ということである。すなわち、この宇宙は私たち人間を誕生させるために存在しているのではないか、ということである。私たちは、たまたま地球上に生まれたのではなく、宇宙そのものが私たちを必要としているから、知性を持った人類を生み出したのだ、ということだ。もちろん、読者の中には「そんな馬鹿な」と思う人も多いただろう。確かに常識から考えれば、「人類を生むために、宇宙が作られた」というのは、暴論に属する話かもしれない。（中略）しかし、最新の物理学の成果から考えると、このような推定はけっして暴論とはいえないのである。この「宇宙は人間を生み出すためにある」という考え方を、現代物理学では「宇宙の人間原理」と

呼ぶ。最初にこれを提唱したのは、アメリカのロバート・ディッキーという宇宙論学者であった。もちろん「宇宙の人間原理」は、あくまで仮説である。この考え方に対して反対意見を唱える人もいる。しかし、この原理は単なる思いつきで作られたアイデアではない。物理学の最新知見をもとに言われていることなのだ。』

『 ケンブリッジ大学のスティーブン・ホーキングも、現在、私たちが見ている宇宙は「神」のような、何らかの手によって作られた設計図にしたがって作り出されたのだという趣旨のことを言っている。物理学に「神」とか「創造主」という言葉を持ち込むのはきわめて危険なことであるとは言ってもない。しかし、現実の物理学の歴史を見ていくと、今や私たちは「創造主」の領域に迫りつつあるというのも、事実であろう。この宇宙を理解していこうとする人間の努力は、宇宙創成の瞬間をも解き明かそうとしている。また、一方では生命進化の秘密も、徐々に明らかになりつつある。36億年前に地球上に誕生した生命は、今や「神のみわざ」を理解しようというところまでできているのである。』・・・と。

私は、「平和原理」を追い求めている。そしてまた、上述のように、桜井邦朋は「人間原理」が物理学の最新知見にもとづいて言われていることを述べている。

「人間原理」は「宇宙の意思」である。私は、ニーチェの「重力の魔」と「力への意思」について、私の電子書籍「さまよえるニーチェの亡霊」のなかで詳しく説明したが、「重力の魔」の働きかけにもめげずに、高見に向かって階段を一步一步登っていくには、

「神」に「祈り」を捧げることが必要である。「神」に「祈り」を捧げるということは、「神に伺いを立てる」ということであり、「神」の「さよう、さよう」という声なき声を聞くことである。「宇宙の意思」とは、「神」、それは創造主とか唯一絶対神と呼んでも同じことだが、「神」というものは「正義」を好む。「悪魔」は不正義を好む。したがって、「神に伺いを立てる」ということは、正義に向かうことでもある。しょっちゅう

「神」に「祈り」をささげている人は道を誤ることはない。「正義の魂」が宇宙に満ちれば、国家は平和になる。「宇宙の意思」とは、「正義の魂」が宇宙に満ちることであるし、国家が平和になることである。

すなわち、物理学の最新知見にもとづいても、「自然の原理」とは「神のみわざ」のことである、といっても良い。

それではこれから、「祈り」の効果について科学的な説明をすることとしたい。といっても、問題の焦点は、農民の思いが基になって何故毛沢東に天命が下ったのかということである。そして、その天命が何故毛沢東を今皇帝に押し上げたのかということである。したがって、以下においては、「祈り」の効果を経験的に説明しながら、天命の科学的説明をすることになる。

農民というものは、自然とともに生きている。したがって、自然の持つ不可思議な力を常に感じながら生活をしている。これはとりもなおさず農民は常に神とともにあるということだ。中国での神ということになると、おおむね道教の神であるが、自然に生きる農民には神頼みが少なくないだろう。どのような形式の神頼みであっても、そこには必ず「祈り」がある。「祈り」の科学的な説明は、私は、私の電子書籍「祈りの科学シリーズ」の(1)「<100匹目の猿>が100匹」でひととおり行った。詳しくはそれをご覧頂きたい。

http://honto.jp/ebook/pd_25231954.html

ここではその要点を述べる。

宮崎県の南部の海上に幸島（こうじま）という無人島がある。そこには数十匹の野生の日本猿が、以前から生息していた。独創的な「棲み分け理論に基づく今西進化論」で世界的に著名な生物学者、今西錦司京都大学教授が主宰する同大学の動物学教室では、1952年にこの幸島の野生猿の生態研究のために、餌付けを開始した。このフィールドワークには今西教授の門下生である徳田喜三郎、伊谷純一郎両博士が責任者となり、京都大学の動物学教室の若い研究者たちがそれに従事した。

幸島に生息する野生の猿に、研究者たちがこれまでの猿たちの食物であった植物の芽や、つぼみ、果実といった自然のものに替えて、新しく餌付けのためのサツマイモを与え始めた。最初に専従者たちが予想していたより容易に、このサツマイモの餌付けは成功した。この島の野生猿たちは、意外とこのサツマイモを気に入ったようであった。しかし、これらのサツマイモには、砂や泥が付いて汚れたものがかなりあったので、猿たちはそれらを嫌って残すことがあった。

そのような状況下である日突然、群れの中の生後18ヶ月の若い雌猿が、そのイモを海辺に持っていき、海水に浸けて洗って食べることを思いついた。塩味が付いたイモは、若い雌猿にとってこれまでにない美味なものであったろう。しかも海水に浸けることで、砂や泥の汚れも取れるという利点がある。早速この雌猿は、母親にイモを洗うことを教えた。やがてその食習慣は他の猿にも、非常にゆっくり伝播していった。ここまではごく当たり前の現象である。私たちの社会の中にも見られるように、新しい習慣を頑なに拒絶する猿もいたのである。現在では「100匹目の猿効果」といわれている、奇妙な現象が生じたのは、サツマイモの餌になって6年目のことであった。

餌付けを開始して6年たった1958年の秋には。この島の5歳未満の猿は、この新しい食習慣を全員身につけていた。しかし、5歳以上の猿には、そのような食習慣は依然として、まだ認められなかった。不可解なことが起ったのはその時である。

生物学者のワトソンは既述の自著の中で、話を進める都合上、便宜的にいま述べた1958年秋の状態では、新しい食習慣を獲得していた猿は、99匹だったとして、この異変現

象を説明している。ある日、そこにはもう一匹、年長の猿群の中から改宗者が加わった。この100匹目の猿の加入によって、あたかも臨界量を突破したかのように、その日の夕食時にはほとんど全部の猿が、イモを洗って食べるようになったのである。さらに、もっと驚くべきことが同時に起った。海を隔てられている別の無人島の野生猿のコロニーにも、本州の高崎山のコロニーにも、このサツマイモを洗う食習慣が自然発生したのである。後にこれは「100匹目の猿効果」と呼ばれるようになり、いまでは猿以外のものにも、同様な現象例の認められることが、他の科学者によって指摘されている。

「神」には、キリスト教やマホメット教などの宗教でいう「神（ゴッド）」や「アッラーの神」などの他に、インディアンがいう「グレートスピリット」というものがある。そのほか村上和雄がいうサムシンググレートというのがある。直訳すると「偉大なる何者か」だが、村上和雄は科学的立場から「生物の進化に影響を与えた人智を超えた存在」のことをこのように呼んでいる。

「天は自ら助く者を助く」「天は人の上に人を作らず」「天の声」とか、「天」という言葉がよく使われるが、「天」は東洋思想の世界観が生み出した概念であって、上記の言い方とは立場が違う。「神（ゴッド）」や「アッラーの神」も、「グレートスピリット」も、サムシンググレートも、「天」ないし「天の神」も・・・宇宙に存在する「外の神」である。私は、神には「外の神」「内の神」があると考えている。

「内なる神」は、脳の中に存在する神で、中沢新一のいうスピリットがそうである。スピリットはいつもどこかに隠れて表に姿を出さないが、何かの拍子に表に姿を現す。その姿はその都度違っている。山の神、水の神、火の神、道祖神などがそうである。

村上和雄の著書「人は何のために<祈る>のか」（2010年12月、詳伝社）によれば、「祈り」についても同様のことがあり、それは医学的事実として認められる。しかし、医学的事実として、ブラシーボ効果では説明のつかないことがあるという。上記著書から、その部分を紹介しておく。すなわち、

『最近、アメリカの病院で、大変興味ある実験が行われました。新病患者393人による実験で、他人に祈られた患者はそうでない患者よりも人工呼吸器、抗生物質、透析の使用率が少ないということがわかりました。しかも、西海岸にあるこの病院に近いグループからの祈りも、遠く離れた東海岸側からの祈りも、同様に効果がありました。そして、これらの患者は祈られていることすら知らなかったのです。距離を超えて、他の人のために祈ることが有効だとすると、この祈りは単なるブラシーボ効果では説明が付きません。』・・・と。

多くの可能性の中から、祈りは祈りの振動だけを選択しているのである。神経細胞ネットワークは祈りの振動だけを選択し、それを他の神経細胞ネットワークに伝えていくのであ

る。その結果祈りが身体にいい結果をもたらすのである。このことは「内なる神」が祈りを聞き届けてくれたと考えざるを得ない。脳には「内なる神」が存在するのである。

ところで共鳴というのとは一体になることだから、祈りの共鳴の場合、「内なる神」と「外なる神」と一体不可分な存在である。したがって、脳に「内なる神」が存在するとすれば「外なる神」も存在するのである。

話をごろっと変えよう。悪魔の話である。実は悪魔も存在するのである。「呪い」というのがある。「丑の刻参り」というのをご存知でしょうか？ わら人形を木にくくり付け、相手を強く呪いながら金槌で五寸釘を打ち付けるのである。かつて私は貴船という題で「丑の刻参り」の話を書いた。能にも出てくる「鉄輪」の話である。紙枚の関係もあり、あえてここでは書かないが、興味のある方は私のホームページを見てもらいたい。

要するに、「内なる神」や「外なる神」が存在するし、一方で、「内なる悪魔」や「外なる悪魔」の存在するのである。ゲーテの「ファースト」はある老科学者が悪魔と取引をして悪魔と共生する話だが、中村雄二郎はリズム論の立場から、今ゲーテが面白いと言ったが、私もゲーテは神もおれば悪魔もいるという真実を見ていたと思う。ゲーテは面白い！さて、次に作法の話に移ろう。「丑の刻参り」で思うのは「呪い」に作法というものがあるように、「祈り」にも作法と対象物があつた方がよい。作法にしたがってお祈りをした方がやはり強力な震度をするということだ。作法にしたがってお祈りをした方がより効果がたい。「祈り」の作法。それは教会でも良いし、神社でもお寺でも良いし、お地蔵さんや道祖神でも良い。大事なものは何か祈る対象物に対して祈るということである。それもできるだけ「リズム」を伴つた方がよい。牧師の声、教会音楽、祝詞の声、太鼓や笙や笛の音、木魚や鐘の音などなど音にはいろいろあるが、私は音楽がいちばん良いように思われる。

私は地域づくりの立場にいるので、地域づくりの立場から言えば、「祈りの空間」を今後どう作っていくか・・・大いなる関心を持っているが、このことに関してはいずれ稿を改めて述べることになる。

ここでは、「外なる神」と「内なる神」の科学的な説明、すなわち「天は自ら助くる者を助く」ということの科学的な説明をするにとどめるが、ご理解いただいたであろうか。

なお、誤解があるといけないので、念のために申し添えておくが、人間というものは「内なる神」の存在する誠に不思議な動物だが、その秘密は「知恵の能」にある。

そしてその不思議な「知恵の能」をつくつたのは、実は、「外なる神」である。「内なる神」があつて「外なる神」があるのではない。もともと「外なる神」がおわしますのである。「外なる神」のつくつたその不思議な「知恵の能」は、私たち人間はまだ一割ぐらいしか使っていないらしい。ほとんどのものがこれからの発達を待っているという。

「祈り」によって、「内なる神」が振動して「外なる神」と共振する。まさに、これはリズム現象である。「祈り」は「リズム」である。

農民の「祈り」によって、農民の「内なる神」と天にまします「外なる神」との共振が起こる。その農民と毛沢東の波長が合えば、その波長によって毛沢東と天にまします「外なる神」との共振が起こる。つまり、これが天命の正体である。天命とは天の意志ということであるので、それによって毛沢東のみならずも毛沢東の周辺の人々にどのような効果が生じるのかは「神のみぞ知る」で具体的な説明はできないが、毛沢東にとって良い効果が必ずあるのである。「波長が合う」ということが大事である。この世には、人間の五感を超えた、情報伝達システムが存在する。心の状態は、ある種の波動なのである。チューニングというのは、送信機と受信機の波長が合えば音がである。音という波動が発生する。人間でも同じようなことが起こり、二人の波長が合えば、言葉を介さずに、印象による情報伝達が可能である。恋人同士に限らず波長の合う人同士は、無意識的にこれを行っている。そして、両者の心を強く結びつけるために、神が介在するのである。農民と毛沢東の波長が合った。そこに数々の神が介在したであろうが、遂には、神々の最高の神・天帝がお出ましになって毛沢東に天命が下ったのである。